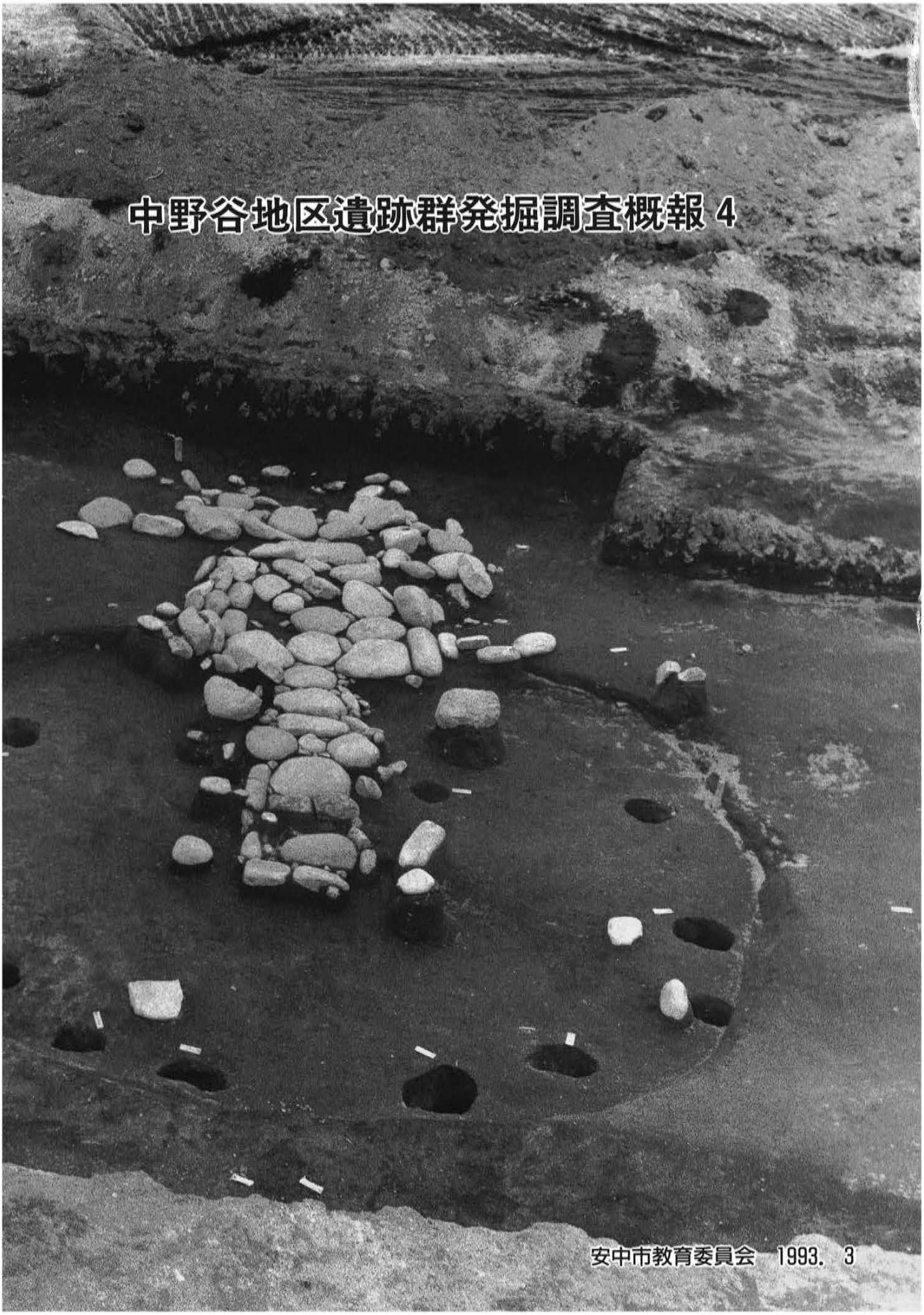
中野谷地区遺跡群発掘調査概報 4



安中市教育委員会　1993. 3

表紙：下宿東遺跡敷石住居　　細田遺跡「牧」の区画と推定される溝　　右ページ：北東・堤下遺跡

序

中野谷地区の土地改良事業も５年目となり、すでに土地改良が終了した畑地帯には、整然と農作物が生育しています。この中野谷地区は原始・古代の埋蔵文化財の宝庫であり、毎年数々の重要な遺跡が発見されています。発掘調査はこうした貴重な埋蔵文化財を後世に残すことを目的として行われる事業です。そこで、発掘調査の成果を公表し、より多くの市民の皆さまに安中市の歴史・文化財について知っていただこうと存じております。

今回の概報では、縄文時代から平安時代に至る長い間に残された五つの遺跡について、発掘調査の成果の一端を公表することになりました。この事業は関係者の皆さまのご理解とご協力により成り立っています。地元の皆さまのご協力に感謝いたしたく存じます。また、安中市の文化財保護行政の一端を担い、寒い中を調査に従事していただいた方々には、この場を借りて感謝の意を表したいと存じます。

平成５年３月

安中市教育委員会
教育長　山　中　誠　次

例　言

1　本書は高崎土地改良事務所が行った平成3年度県営土地改良事業横野平地区に伴う発掘調査概報である。

2　平成3年度に調査を実施した遺跡は細田遺跡（G—19）和久田遺跡（G—18）、東向原遺跡（G—20）である。本書はこれに平成2年度に調査を実施した下宿東遺跡（G—11）、北東・堤下遺跡（G—12）を含めた発掘調査概報である。

3　発掘調査及び遺物整理は平成3年度・平成4年度文化財保存国庫補助金、県費補助金及び、横野平地区埋蔵文化財発掘調査委託金により実施した。

4　発掘調査は平成3年度に実施し、遺物整理は平成3年度・平成4年度に実施した。

5　調査は安中市教育委員会直営で実施し、社会教育課文化財係主事大工原豊が担当した。

6　本書の編集・執筆等は大工原が行った。

7　遺構写真の撮影は主として大工原が行った。航空写真は(有)青高館に委託して行った。

8　調査期間中次の方々に御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。
（敬称略・五十音順）
麻生敏隆　金井安子　鈴木保彦　関根慎二　早田　勉　多胡好夫　戸田哲也　能登健

目　次

序
例言・目次

Ⅰ　調査の経過と方法……1
Ⅱ　遺跡の地理的・歴史的環境……1
Ⅲ　遺跡各説……4
　1 下宿東遺跡……4
　2 北東・堤下遺跡……8
　3 細田遺跡……13
　4 和久田遺跡……16
　5 東向原遺跡……18
Ⅳ　まとめ……20
　1 縄文時代の遺跡について……20
　2 古墳時代の遺跡について……20
　3 奈良・平安時代の遺跡について……21

I　調査の経過と方法

県営畑地帯総合土地改良事業横野平地区は昭和63年度から開始され、平成３年度は第４年度目である。継続して土地改良事業が実施されることで、埋蔵文化財の発掘調査を実施して、記録保存の措置を講ずることになった。土地改良事業の区域内には遺跡が複数存在することが、分布調査などにより判明しているので、その区域を中心に発掘調査を行った。

発掘調査は表土掘削→遺構確認作業→遺構精査→遺構写真撮影→遺構図面作成の順で実施した。また、遺物整理作業は遺物の水洗・注記→接合・復元の順で行い、並行して遺構図面の整理・作成、各種図面台帳の作成、写真整理、トレース等を行った。

発掘調査は平成３年10月11日から平成４年１月21日まで実施した。また、遺物整理は平成３年度及び平成４年度に断続的に実施し、現在も継続中である。

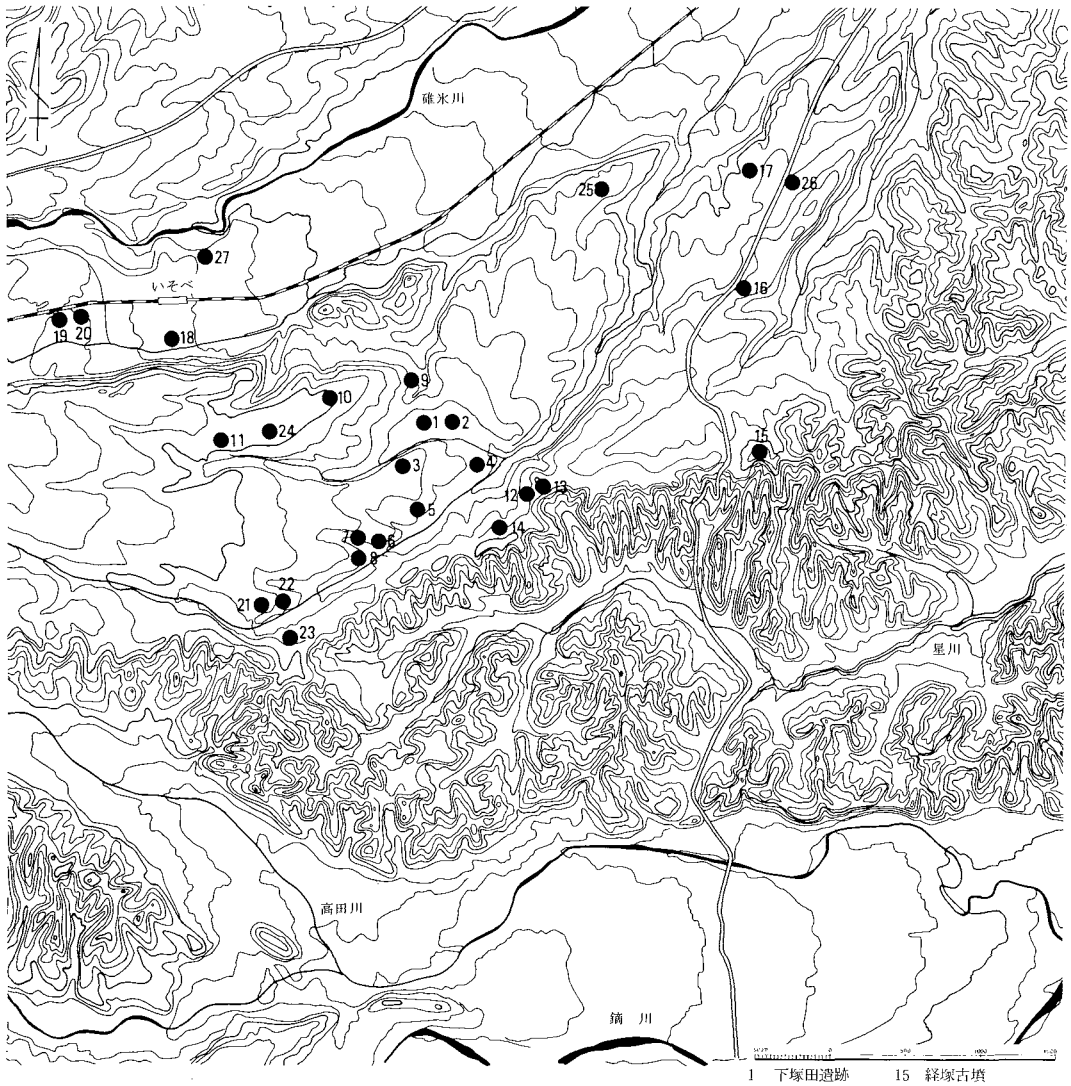
II　遺跡の地理的・歴史的環境

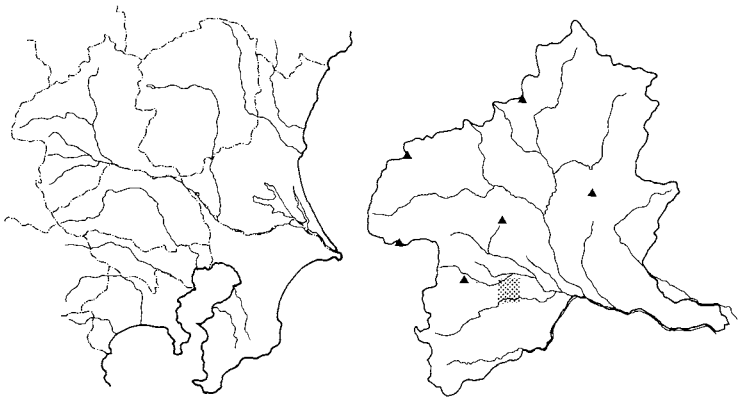
中野谷地区遺跡群は、群馬県安中市中野谷に存在する。この遺跡群は安中市の南西部、碓氷川上位段丘の台地上に位置する。台地の南部には猫沢川が東流し、同じく北部には通称天神川と呼ばれる小河川が東流し、台地の東部で合流する。

下宿東遺跡（８）、細田遺跡（22）、和久田遺跡（21）は猫沢川の北岸に位置する。東向原遺跡（23）は猫沢川の南岸に存在する。また、堤下・北東遺跡（９）は柳瀬川へ注ぐ小河川の谷頭付近に存在する。

周囲の遺跡を概観すると、縄文時代では次の遺跡が代表的な遺跡である。早期の集落址である金井谷戸遺跡（６）、前期・中期の集落址である松原遺跡（24）・中原遺跡（５）・東畑遺跡（７）・大下原遺跡（14）、縄文後・晩期を主体とする天神原遺跡（11）などが存在する。弥生時代では、初期弥生時代の集落址である注連引原・同II遺跡（12・13）、後期の集落遺跡である大下原遺跡などがある。また、奈良・平安時代の「牧」の放牧施設が検出された中原遺跡（５）、同時期の鍛冶工房址群が検出された下塚田遺跡（１）、同時期の溜井の検出された落合遺跡（２）などの生産遺跡も発見されている。

本遺跡群の歴史的変遷を概観すると、縄文時代前期には多数の集落遺跡が集中し、松原遺跡のような大規模拠点集落も存在する。しかし、中期の集落遺跡は小規模で数も著しく少ない。また、後・晩期になると天神原遺跡のような集落遺跡が形成される。ところが、弥生時代になると再び遺跡数は激減し、以降古墳時代でも小規模な集落が散在する程度である。奈良・平安時代には「牧」の区画と推定される大規模な溝が広範囲に確認され、その関連施設と推定される鍛冶工房址群などが検出されるものの、一般的な集落遺跡はほとんど存在しない状況を呈する。このように、中野谷地区の歴史的変遷は変化に富んでおり、その要因についてさらに検討する余地がある。





1　下塚田遺跡
2　落合遺跡
3　北下原遺跡
4　落合原遺跡
5　中原遺跡
6　金井谷戸遺跡
7　東畑遺跡
8　下宿東遺跡
9　北東・堤下遺跡
10　乙北原遺跡
11　天神原遺跡
12　注連引原遺跡
13　注連引原Ⅱ遺跡
14　大下原遺跡
15　経塚古墳
16　道前久保遺跡
17　諏訪ノ木遺跡
18　田中田・久保田遺跡
19　西裏・西新井遺跡
20　諏訪辺遺跡
21　和久田遺跡
22　細田遺跡
23　東向原遺跡
24　松原遺跡
25　荒神平・吹上遺跡
26　蔵畑遺跡
27　塩ノ久保遺跡

第１図　中野谷地区遺跡群と周辺遺跡の位置

下宿東遺跡全景（東方から）

III 遺 跡 各 説

1 下宿東遺跡

この遺跡は猫沢川に面した台地に存在する。この台地は小さな谷地が入り込んでおり、東に舌状に細長く延びた状態を呈する。ゴボウの深耕により遺構の大部分は破壊されてしまっており、縄文時代以降の浅い遺構の遺存状態は非常に悪い。

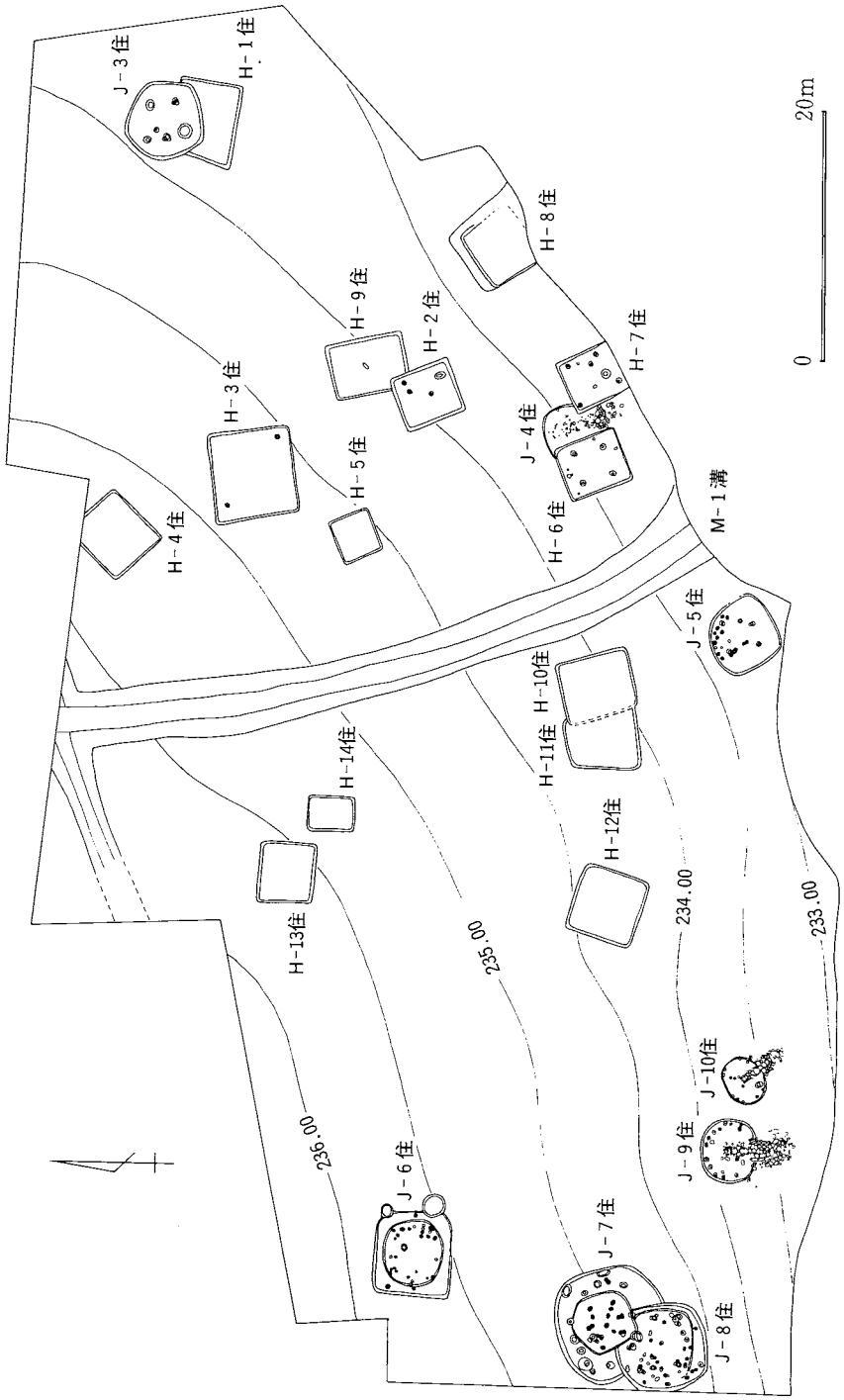
縄文時代前期（諸磯ｂ期）の住居址は４カ所、８軒が検出された。台地の縁辺部に分布する傾向が認められる。Ｊ－６号住居址は２軒が重複する。また、Ｊ－７・８号住居址は４軒が重複する。この段階の住居址は隅円方形、不整五角形を呈する。全体的に竪穴の掘り込みは深く比較的遺存状態は良い方である。遺物は廃棄の状態を示し、多量覆土中から出土している。また、Ｊ－３号住居址では集石土坑が重複して検出されたが、土坑の方が新しい。

後期の敷石住居址は台地の縁辺部で３軒検出された。Ｊ－９・10号住居址の部分は当初の確認面では全体に黒色土が広がっていたので確認できず、さらに確認面を下げたところ、褐色土層（Ⅳ層）中で敷石が検出された。また、Ｊ－４号住居址は古墳時代の住居址によって部分的に壊されており、敷石部分が乱されていた。これらの敷石住居址は敷石は張り出し部分から炉址部分まで直線的に配置される形態のもので、後期前葉（堀之内期）に属するものと推定さる。敷石部分は内側の石は平坦面を上部にして配置されているが、側縁部の敷石は立てられ、外部との区画をなしている。石囲炉は敷石の端部に位置し、正方形を呈している。

古墳時代前期（石田川期～和泉期）の住居址は全部で14軒検出された。正方形を呈するものが主体を成すが、長方形の例も認められる。調査区の中央から東部にかけて分布する。重複する例は２例４軒認められる。Ｈ－６号住居址以外は遺存状態が非常に悪い。Ｈ－６号住居址では小形円底壺や高坏などの土器が完形で検出されている。

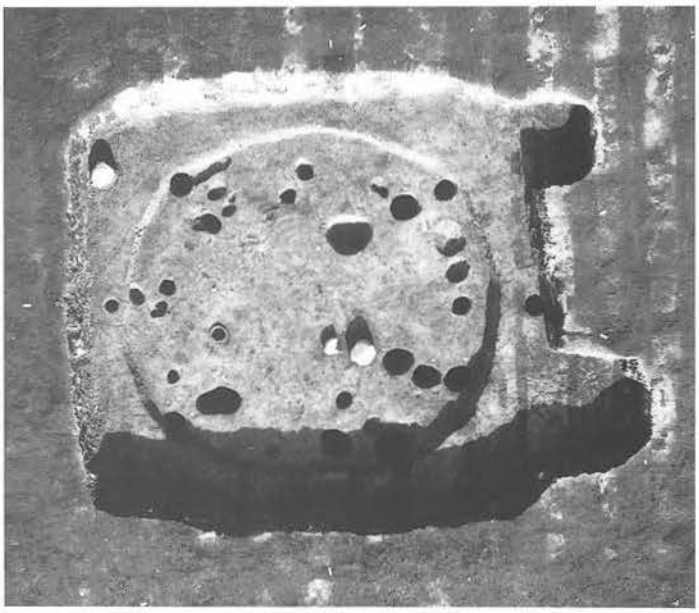
調査区の中央部では南北に台地を区画する大規模な溝（Ｍ－１号溝）が検出された。溝は逆台形状を呈しており、幅約3.5～５ｍ、深さ約1.5～２ｍを計る。覆土上部には浅間Ｂ軽石（Ａｓ－Ｂ：1108年降下）が帯状に堆積しており、この段階にはもはや機能していなかったことが窺える。この溝はこれまでに周辺で検出された「牧」の区画施設と推定される溝と、ほぼ同様の形態・規模ものであり、奈良・平安時代のものと推定される。

この溝は今回の調査では長さ55m検出されたが、北に位置する平成元年度調査区でもその延長部分が検出されており、全体としてはクランク状を呈している。このＭ－１号溝は舌状台地の先端部を隔絶するように掘られており、特殊な機能を有していたものであると推定される。また、Ｍ－１号溝と交差して調査区の北部でやや規模の小さいＭ－２号溝が検出された。覆土上部には同様にＡｓ－Ｂが堆積しており、ほぼ同時期の所産と推定される。

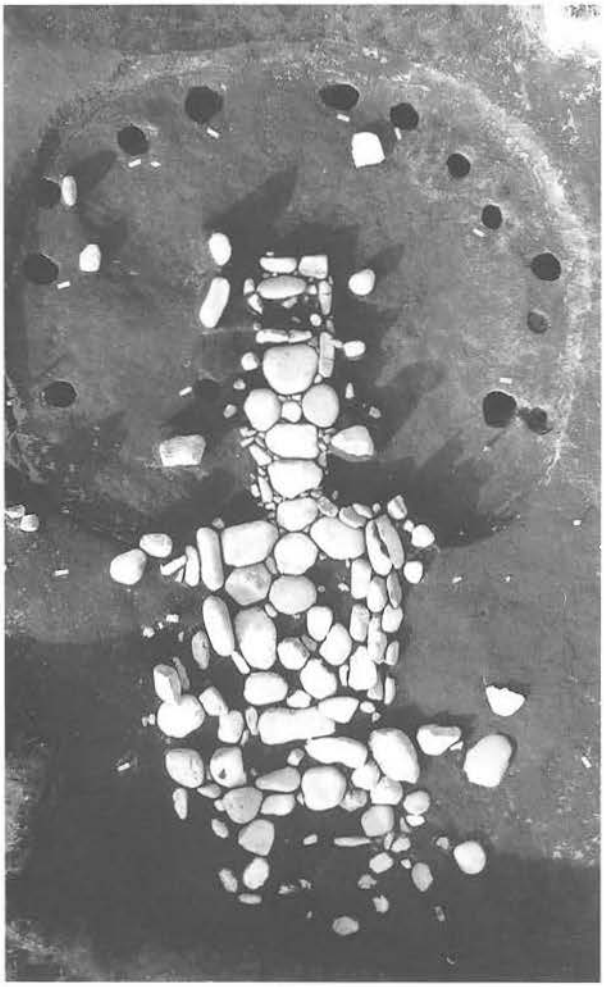


下宿東遺跡全体図（1：600）

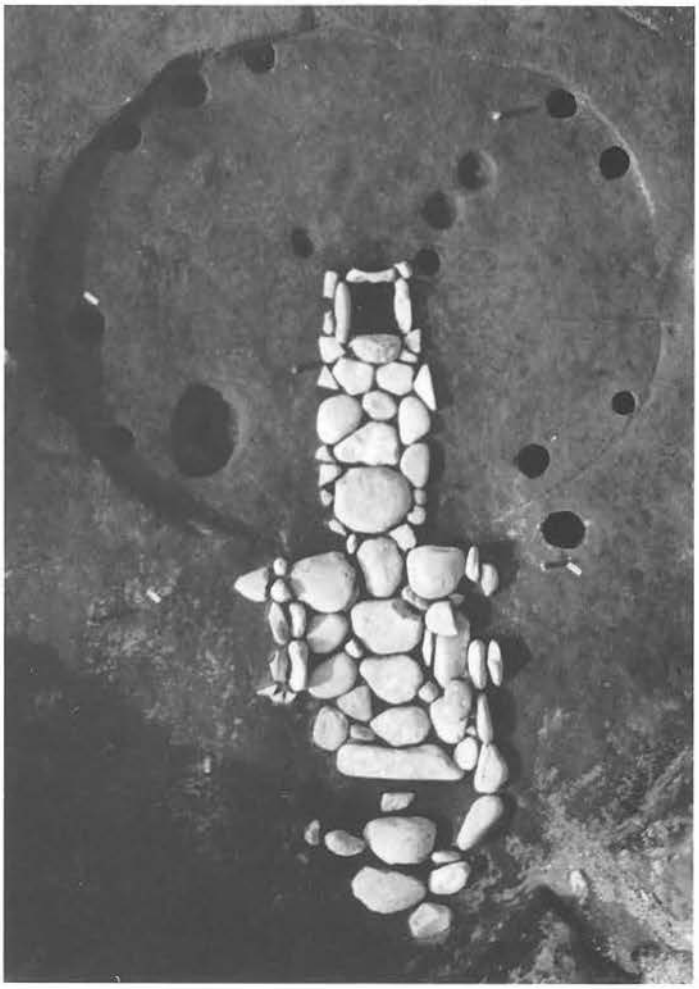
J－7号住居址・J－8号住居址



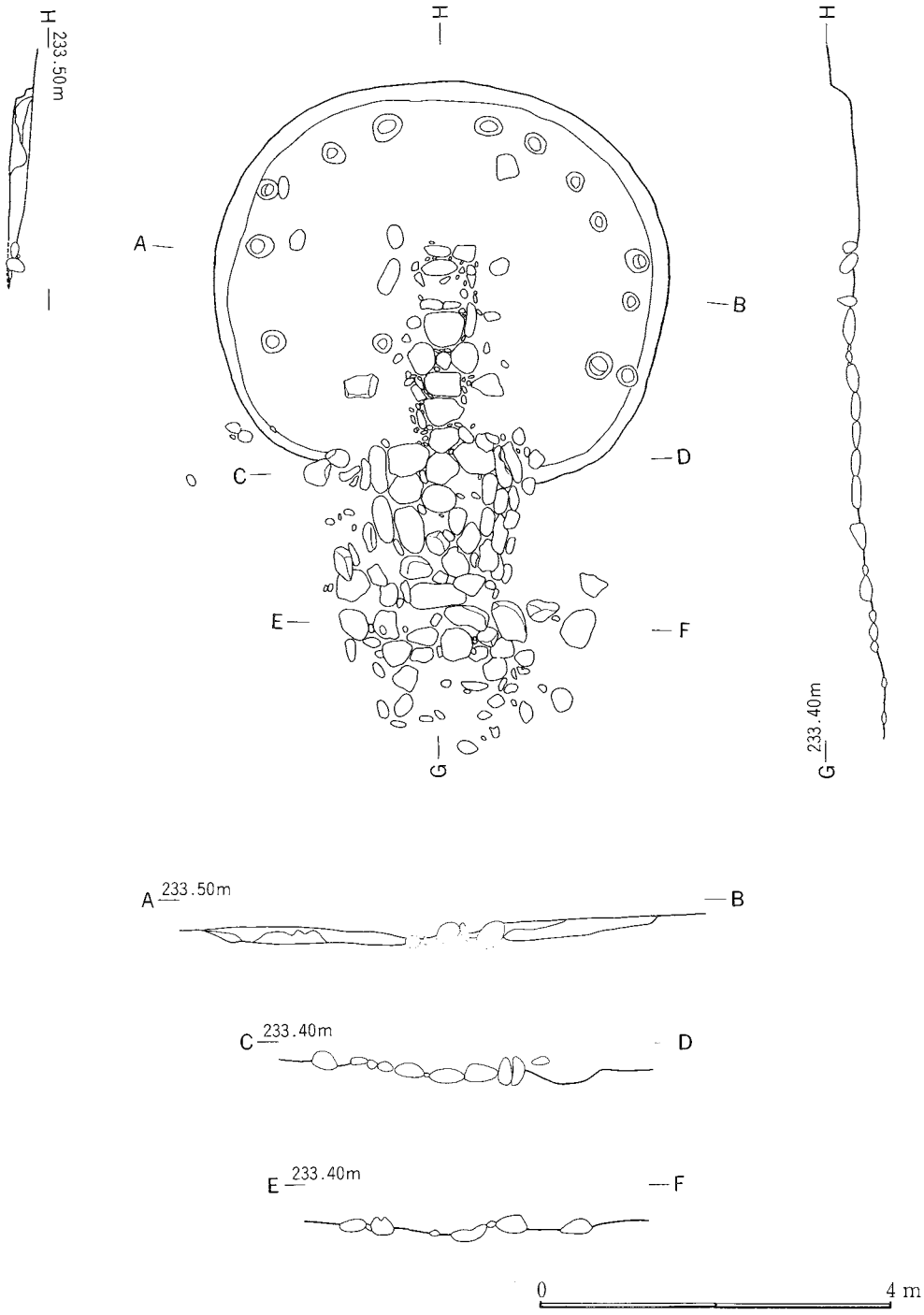
J－6号住居址



J－9号住居址



J－10号住居址



第２図　Ｊ－９号住居址実測図（１：80）

2　北東・堤下遺跡

本遺跡は中野谷地区遺跡群の中では北東部に位置する。東へ張り出す舌状台地の先端部の東へ傾斜する部分にあたる。傾斜は比較的急である。また、谷地が舌状台地の南から東へ曲がりながら延びている。谷頭部分には湧水点があり、この湧水を利用した堤が江戸時代（延宝年間）に構築されたという伝承が残っている。この堤が地名の由来となっている。

この遺跡では縄文時代、古墳時代～奈良時代の時期に集落が形成されたことが判明した。ゴボウの深耕がほとんど行われていなかったため、遺構の遺存状態は比較的良好であった。

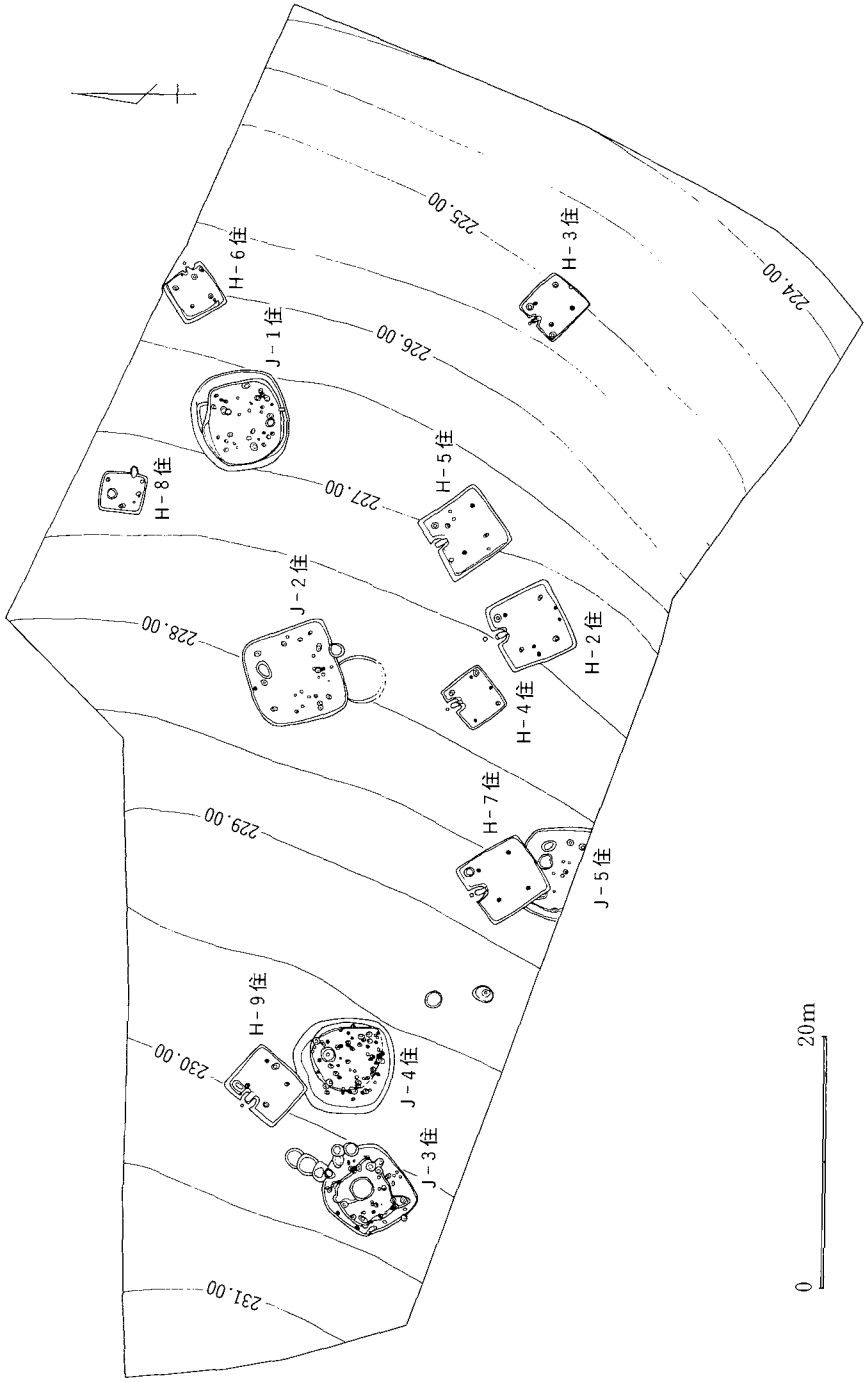
縄文時代前期後葉（諸磯ｂ期）の住居址の５カ所９軒検出された。住居址分布上の特徴としては、Ｊ－５号住居址を除き、東西に一列に並ぶ状態を示している。Ｊ－２号住居址を除き、各住居址は２軒ずつ重複している。重複の場合、本遺跡では拡張ではなく縮小される例が多い。住居址の平面形は隅円方形を呈する。また、竪穴の掘り込みは比較的深い。遺物は覆土中より廃棄された状態で大量検出されている。そして、住居址内に土坑が存在する例がしばしば認められるが、覆土中より掘り込まれており、住居廃絶後のものと判断される。

中期（加曽利Ｅ期）の遺構としては、土坑数基が検出された。この土坑の中には大形の深鉢形土器が逆位で埋設したものも認められた。さらに、この時期の遺物はＨ－７号住居址の北部を中心に多量分布しており、この部分には住居址が存在していた可能性がある。また、Ｊ－２号住居址の南に重複して竪穴状遺構が検出されたが所属時期は判然としない。

古墳時代後期～奈良時代の住居址は８軒検出された。古墳時代の住居址は６軒存在する。これらの住居址は調査区全体に展開して存在しているが、南に偏在する傾向が認められる。また、奈良時代の住居址２軒は調査区の北東部にまとまっている。

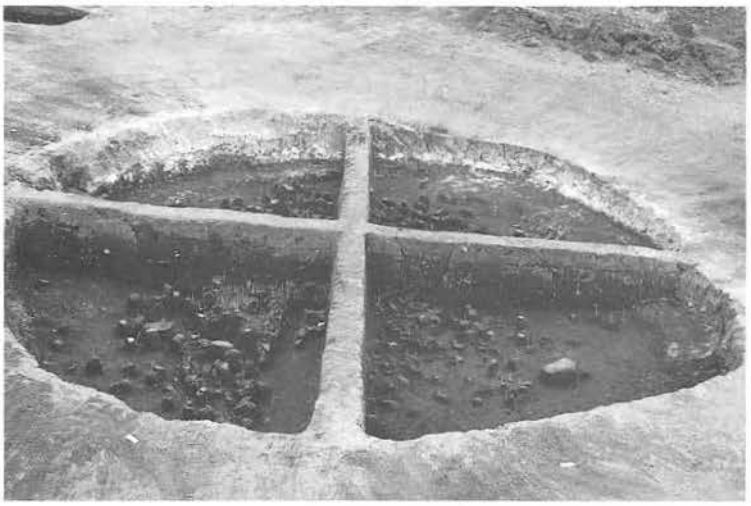
古墳時代の住居址は北竈を有し、中形正方形の規模のものが多い。これに対し、奈良時代では東竈で小形正方形となっている。遺存状態は比較的良好であるが、竪穴の掘り込み比較的浅い。遺物の遺存状態は良好で床面近くから完形遺物が多く検出されている。

今回の調査区の西に平成元年度の調査区が位置するが、そこでは古墳時代後期の住居址が１軒検出されており、遺跡の範囲はさらに西方及び南方へ延びると推定される。また、縄文時代前期の遺跡の範囲は今回の調査区の北及び南へ延びていることが推定される。しかし、平坦部分が少ない傾斜地という地形上の制約があり、遺物の分布も限定されていることから、いずれの段階の集落も比較的小規模なものであったことが推測される。



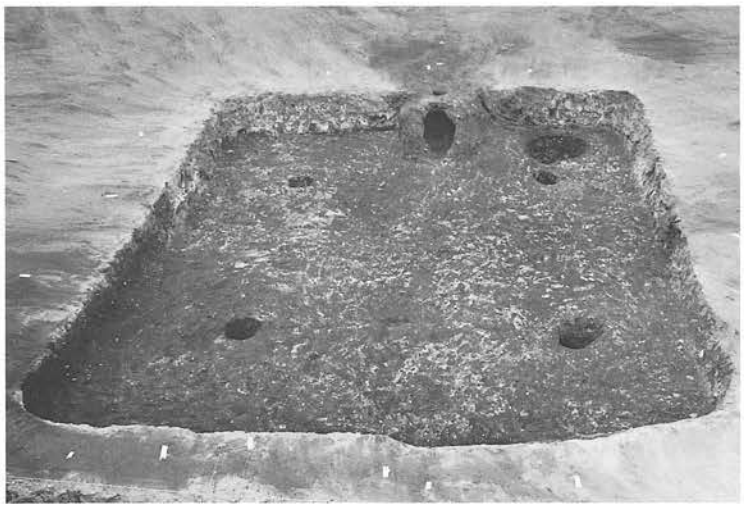
第３図　北東・堤下遺跡全体図（１：600）

Ｊ－１号住居址
隅円方形で深い掘り込みをもつ

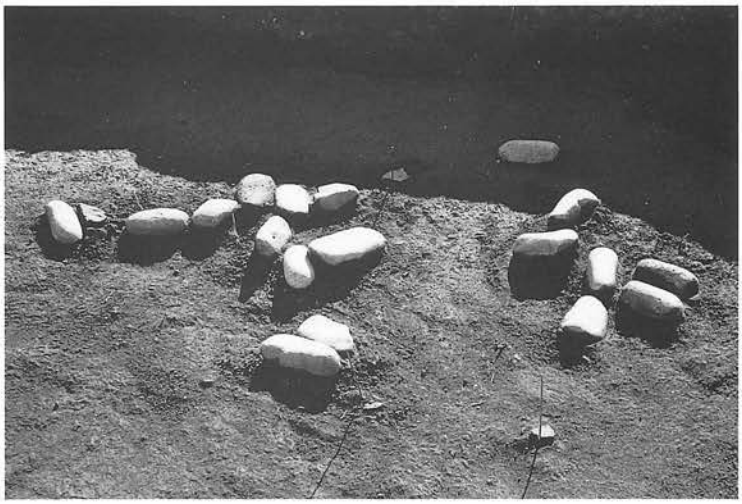


Ｊ－１号住居址遺物出土状態：廃棄された状態で大量の土器や石器が検出された

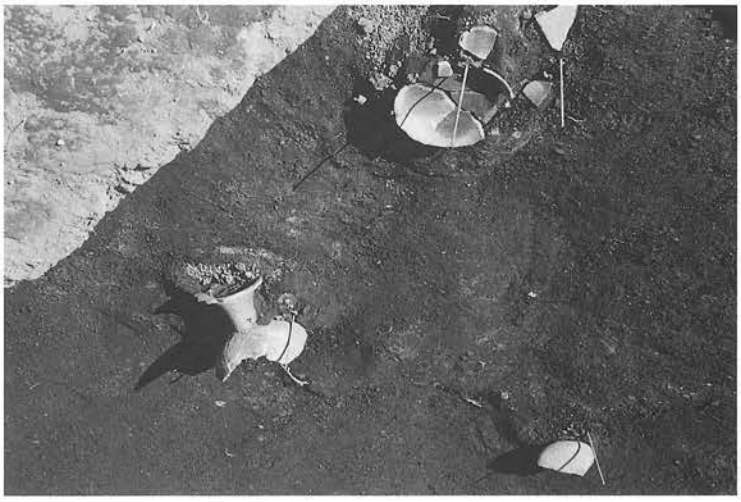
Ｊ－１号住居址石棒出土状態：南側中央で大形の結晶片岩製の石棒が出土した



H－7号住居址
正方形で北中央に竈が構築されている



H－7号住居址薦網石
出土状態：住居の床面上からまとまって出土した



H－7号住居址遺物
出土状態：坏・高坏などが壁際から出土した

細田遺跡Ｂ区全景

3　細田遺跡

本遺跡は猫沢川の北の台地に位置する。この台地の北にも谷地が東西に入り込み、舌状台地を形成している。こうした東西に細長い舌状台地は中野谷地区の特徴的な地形で、こうした場所の先端部から南面部にはしばしば遺跡が形成される。本遺跡の立地はその典型である。また、台地の南部には湧水点が存在し、小規模な沼地があることが調査の過程で判明した。この場所では、縄文時代前期・中期、古墳時代中期・後期の集落遺跡と、古墳時代から奈良・平安時代にかけて「牧」の放牧施設とみられる遺跡が検出された。

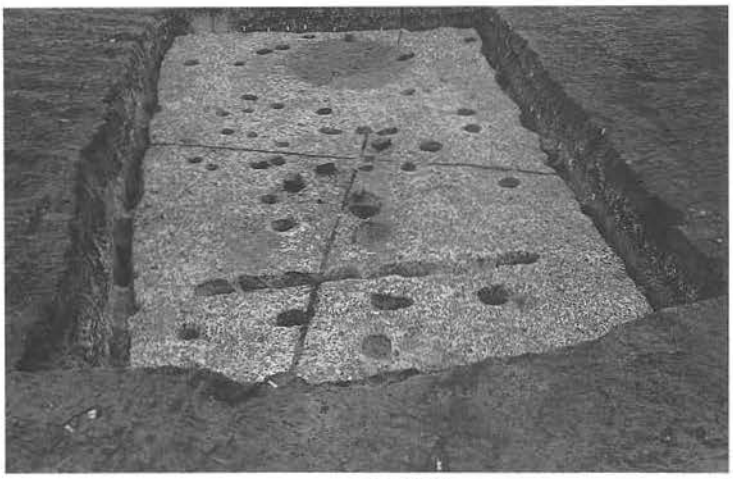
縄文時代前期中葉（黒浜期）～後葉（諸磯ｂ・ｃ期）の住居址は全部で７軒検出された。また、この段階の集石土坑８基、土坑６基が検出された。台地の先端部にあたるＡ区には前期中葉の住居址が２軒存在する。これらの住居址は長方形を呈し、竪穴の掘り込みは浅い。また、比較的深い壁溝を有している。遺物の量は少ない。Ａ区には集石土坑が５基存在する。分布上は東北東から西南西にかけて直線状に点々と存在している。また、北東部では袋状土坑が検出された。この袋状土坑（Ｄ―３号土坑）では底部からクリ・クルミ・エゴマ等が多量検出された。遺物はほとんど存在していないので時期を確定することは困難であるが、周囲に前期の遺構・遺物しか存在していないことから、この段階のものである可能性がある。

また、台地の一端に存在する沼地の周囲（Ｂ区）では前期中葉３軒、後葉１軒の住居址が検出された。前期中葉の住居址は小形正方形で竪穴の掘り込みの浅いもの２軒と、大形長方形で掘り込みの深いもの１軒である。前者は遺存状態が悪く、遺物量が少ない。一方、後者は多量の遺物が覆土中から廃棄の状態で出土している。また、前期後葉の住居址は中形隅円方形を呈し、重複している。遺物は多量出土している。集石土坑は住居址の周辺に３基存在する。また、Ｂ区の北約30ｍの地点では前期終末（諸磯ｃ期）の住居址（Ｊ―10号住居址）が１軒検出されている。

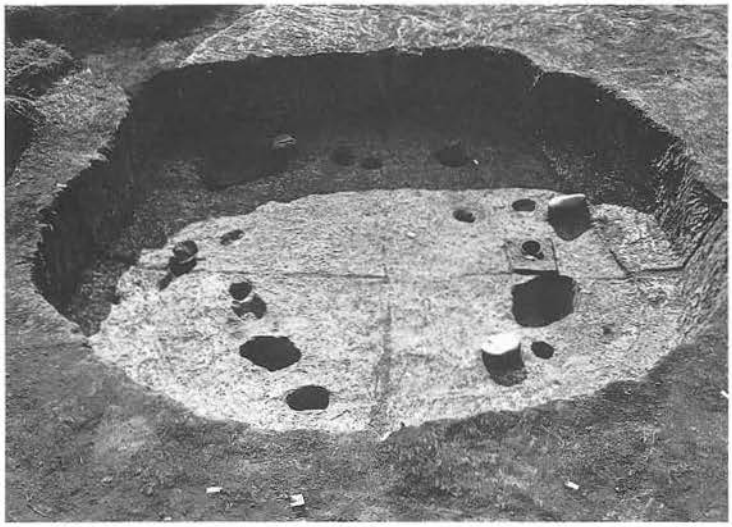
Ｂ区では中期後半（加曽利Ｅ期）の住居址が１軒検出されている。この住居址は小形隅円方形で掘り込みは浅い。中央には石囲炉を有している。遺物は少量出土したのみである。

また、古墳時代では中期１軒　後期期３軒の住居址が検出された。中期の住居址は正方形を呈するものである。遺物は少ない。またこの住居址に重複してほぼ同時期の土坑が検出された。この土坑からは滑石塊が出土している。また、後期の住居址は中形正方形、小形正方形を呈し、比較的深い掘り込みを有している。遺物の出土量は少ない。

「牧」の区画施設と推定される大規模な溝（Ｍ―１号溝）は東西に細長い舌状台地を南北に裂くように構築されていることが判明した。幅３～４ｍ深さ約１ｍの逆台形状を呈する。覆土上部にはＡｓ－Ｂ軽石が堆積している。溝の底部から側面にかけて多数のピットが検出された。これらのピットは連続的に並んでおり、柵列の可能性が高い。また、Ｂ区では土橋が検出された。この土橋は当初から存在していたものではなく、後に溝を埋め戻して構築されたものである。土橋



J－5号住居址

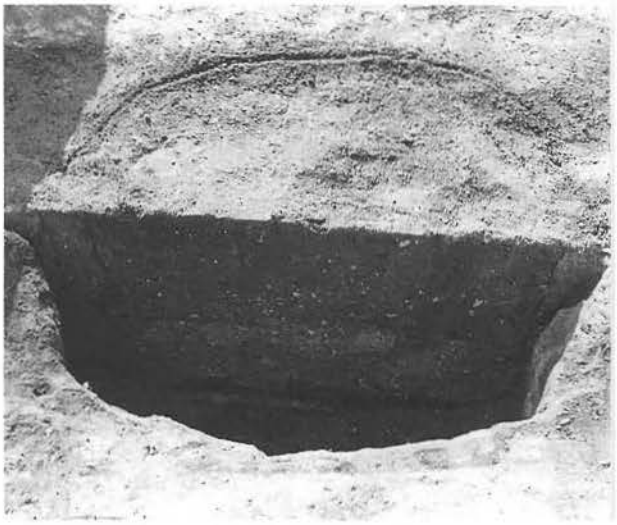


J－6号住居址

部分はロームブロックが大量混入していた。今回の調査では細田遺跡から和久田遺跡にかけて緩やかに北へ湾曲しながら存在している状態を360mにわたって確認したが、さらに西方へ延びている。この溝は古墳時代後期（6世紀代）の住居址を破壊して造られているので、それ以降に構築されたものであることが確認された。

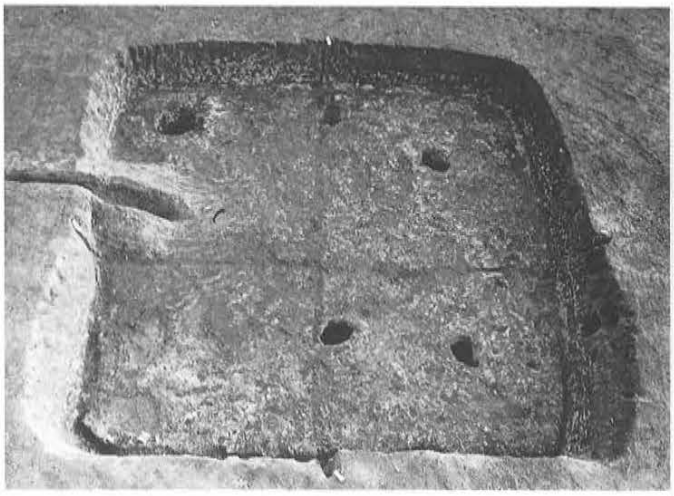
平安時代ではB区南部に存在する沼地の底部で小規模な浅い溝（M－1号溝）が検出された。この溝の覆土中にはAs－B軽石と粕川テフラが連続的に純層で堆積していることが確認された。この他、古墳時代～平安時代と推定されるピットは数百基検出された。これらのピットの

S－5号集石土坑

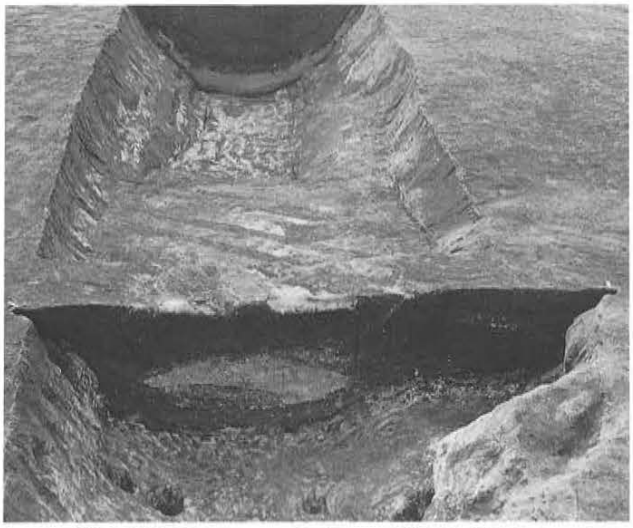


D－3号土坑：底面から炭化したクリ・エゴマ等が検出された

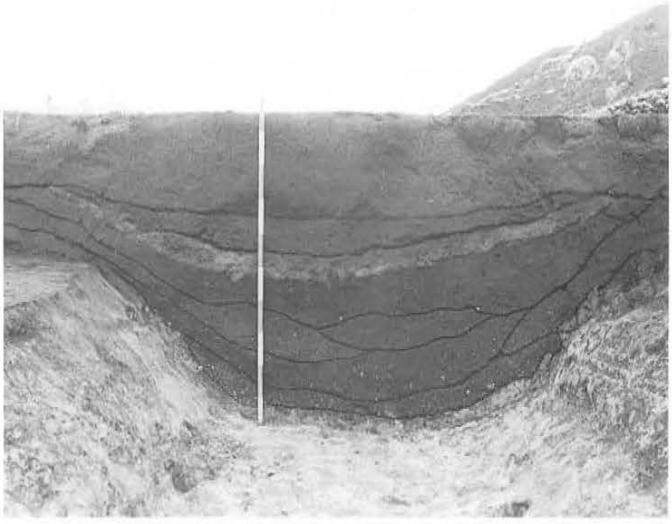
M－１号溝とH－１号住居址の切り合い関係



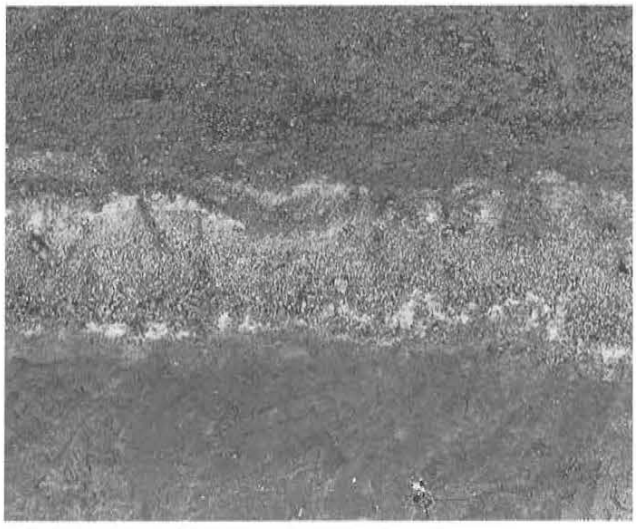
H－４号住居址



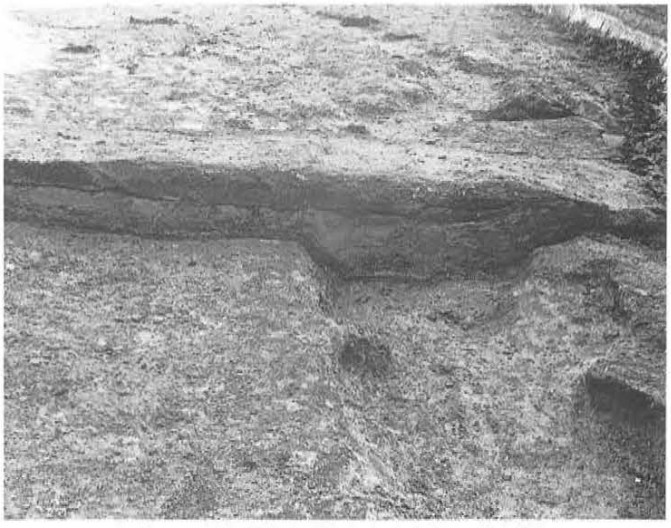
M－１号溝土橋断面：ロームがブロック状に大量混入している



M－１号溝土層断面：上部にＡｓ－Ｂ軽石が堆積する



沼地におけるＡｓ－Ｂ軽石堆積状況：
Ｂ軽石の上部に薄く粕川テフラが堆積する



沼地のＢ軽石直下で検出されたM－２号溝

性格は不明であるが、A区全域及びB区西部分に集中する傾向がある。

以上のように、細田遺跡は縄文時代前期以降各時代に小規模な集落が断続的に営まれた場所であることが判明した。この中では、縄文時代前期中葉～後葉にかけての時期には、人間活動が活発であるが、それ以外の時期の人間の活動は低調であったようである。

また、古墳時代後期以降には「牧」の区画施設と推定される大規模な溝が構築されている。区画の内部は北側と推定されるが、溝に造られた土橋は南部に存在する沼地と最短距離で結ぶ地点に位置しており、相互の関連性が窺える。

4　和久田遺跡

本遺跡は平安時代を主体とする遺跡である。細田遺跡と同じ舌状台地に存在し、西に隣接する位置にある。遺跡の範囲は広いが、遺構の密度は低く、時期の異なる住居址が点在する。また、細田遺跡で検出された大規模な溝（M－1号溝）は本遺跡を東西に横断して掘られている。

縄文時代では前期と推定される集石土坑が1基検出されたのみで、住居址は検出されなかった。また、遺物としては前期～中期のものが散布している。

古墳時代前期の住居址は台地の中央部で1軒検出された。中形正方形で竪穴の掘り込みは浅い。遺物は少量検出されたのみであった。

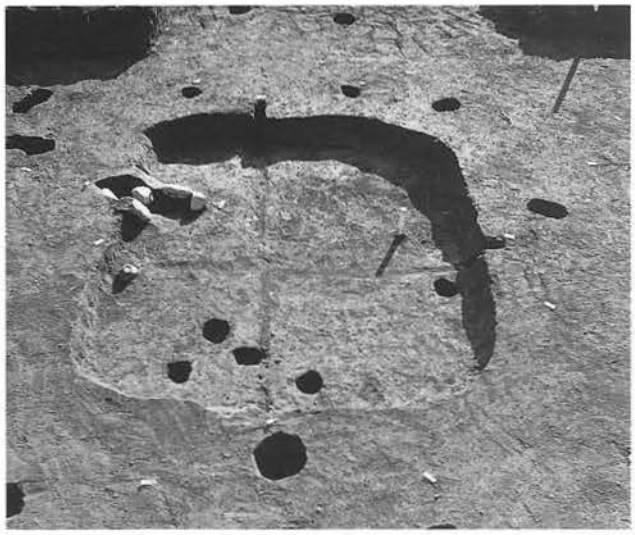
平安時代の住居址は3軒検出された。このうち2軒は台地の南寄りの場に並んで存在しており、9世紀代のものと推定される。H－1号住居址は長方形を呈し、掘り込みは浅い。竈は東に位置し、構築材に板状の凝灰岩が多様されている。また、その東に隣接するH－2号住居址は正方形を呈する。やはり掘り込みは浅く、東竈である。いずれの住居址も遺物は少ない。調査区全域で性格不明のピットが多数検出された。また、台地の中央部で9世紀後半と推定される住居址が1軒検出された。この住居址は正方形を呈し、掘り込みは浅い。竈は東に位置している。遺物は少ないが、灰釉を施した高台付き碗が検出されている。

細田遺跡から続くM－1号溝は本遺跡でも検出されている。この溝は細田遺跡から西南西の方向へ延びていたが、本遺跡の中で緩やかに西北西に方向を変え、さらに西方へ延びている。こうした状態から区画の内部は北側と推定される。また、今回の調査では基本的には溝の確認をしたのみであったが、西端部の一部については底面まで精査した。その結果、底面には細田遺跡と同様にピットが検出された。また、一部のピットは溝上部に堆積したAs－B軽石の上部から掘り込まれたものであることが確認された。

和久田遺跡A区全景

S－1号集石土坑

H－1号住居址（手前）・H－1号住居址（奥）



H－6号住居址

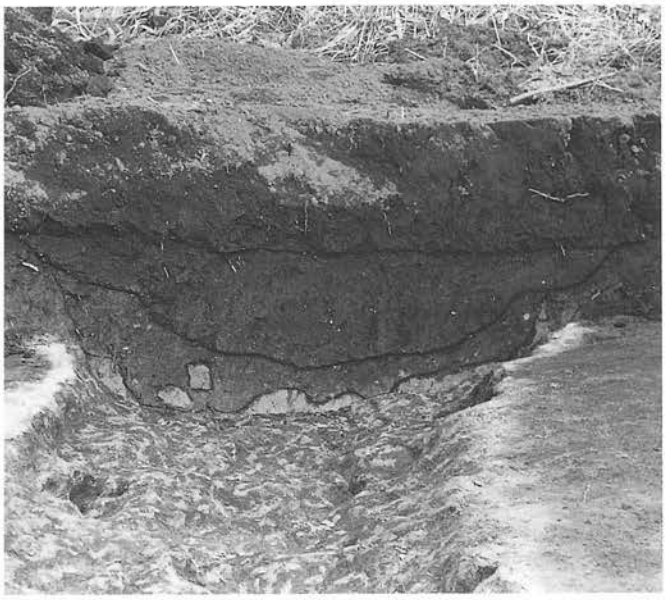
H－6号住居址碗出土状態

5　東向原遺跡

この遺跡は猫沢川の南岸に位置する。遺跡の南西部には小高い丘陵が存在し、遺跡の東部では南から北に向かって浅い谷地が入り込んでいる。遺跡の西部は丘陵の裾部にあたり北東へ緩やかに傾斜している。この部分では縄文時代の前期～中期にかけての遺物が散布していたが、耕作による攪乱が激しく、遺存状態がきわめて悪い状態であった。遺構としてはピット・土坑が散在する程度で、住居址は全く検出されなかった。

また、谷地部分にあたる遺跡の東部では、古墳時代から平安時代に掘られたと推定される小規模な溝（M－1号溝）が南東部で検出された。M－1号溝は幅約0.5～1m、深さ約0.2～0.4mで、断面形は逆かまぼこ状を呈する。調査区の西部で南へ折れ曲がっている。この溝の上部にはAs－B軽石が堆積しており、それ以前のものであることは解るが、遺物はほとんど検出されなかったため、詳しい時期は不明である。また、「牧」の区画溝とは形状が異なっており、その性格は不明である。

東向原遺跡全景



M－1号溝土層断面

M－1号溝

Ⅳ　ま　　と　　め

1　縄文時代の遺跡について

今回報告を行ったすべての遺跡で縄文時代の遺構・遺物が検出されている。中でも前期中葉から後葉にかけての時期の遺跡が多数を占める。この時期の遺跡としては、下宿東遺跡、北東・堤下遺跡、細田遺跡があり、いずれも舌状台地の先端部を選地する小規模な集落遺跡である。同時期に存在する住居件数は１～３軒程度と推定される。これらの遺跡の住居址は重複・拡張が２～３回程度行われる例が多い。また、後葉の住居址では大量の土器・石器が廃棄されていることも共通している。住居址以外の遺構としては、集石土坑と土坑が存在するがいずれも数基程度である。

中期の遺物はいずれの遺跡でも検出されているが、住居址は細田遺跡で１軒されたのみである。これまでの調査でも同じ傾向を示しており、この段階において中野谷地区では人間活動は低調なものであったことが窺える。

後期前葉の段階の集落としては、下宿東遺跡がある。この遺跡では台地の縁辺で敷石住居址が３軒検出されている。この遺跡の場合、遺存状態がきわめて悪かったのでさらに多くの住居址が存在していた可能性もある。中野谷地区では、ほぼ同じ段階の集落遺跡としては、天神原遺跡が存在しているのみである。

2　古墳時代の遺跡について

古墳時代前期～中期（４～５世紀）の遺跡としては、下宿東遺跡、細田遺跡、和久田遺跡において住居址が検出された。特に、下宿東遺跡では14軒の住居址が検出されており、中野谷地区では最多である。これまで、ほぼ同時期の遺跡としては中原遺跡、天神原遺跡があるが、今回調査された細田遺跡、和久田遺跡とともに１～２軒の住居址が検出されたのみであり、いずれも小規模な集落遺跡である。下宿東遺跡とこれらの遺跡とは様相を異にしており、中野谷地区の中では中心的な集落であったことが推定される。この遺跡が存在する場所の南側には、猫沢川沿いに沖積低地が比較的広範囲に存在しており、水田耕作に適していた場所であったと推定される。この場所でのプラントオパール分析では、平安時代にはイネが栽培されている可能性が非常に高いデータが示されている。

また、古墳時代後期（６～７世紀）の集落遺跡としては、北東・堤下遺跡、細田遺跡がある。北東・堤下遺跡では７軒の住居址が検出されており、この段階では中野谷地区で最多である。しかし、重複するものは全く存在せず、集落規模は小さい。

3　奈良・平安時代の遺跡について

この時期の集落遺跡としては、北東・堤下遺跡、和久田遺跡がある。北東・堤下遺跡は奈良時代の住居址が2軒検出されているが、古墳時代後期の住居址も検出されており、継続的に営まれた小規模な集落遺跡と考えられる。また、和久田遺跡では9世紀代の住居址3軒が検出されているが、それぞれの住居址が散在しており、全体像を把握することが困難である。また、集落規模も小さく、継続性も乏しいと思われる。

住居址以外の遺構としては、台地を区画する大規模な溝がある。下宿東遺跡と細田遺跡、和久田遺跡でこうした溝が検出されている。溝の特徴は、幅3～5m深さ1～2mの逆台形状の形態で、覆土上部にＡｓ－Ｂ軽石の純層が堆積している。しかし、細部では構造に違いが認められる。細田遺跡、和久田遺跡では底面及び側面に柵列と推定されるピット列が存在するが、下宿東遺跡ではこうした付帯施設は存在していない。前者と同形態のピット列を伴う溝は中原遺跡Ｆ区南側で確認されている。後者のようにピット列を伴わない溝は中原遺跡Ａ区・Ｂ区で確認されている。

また、下宿東遺跡ではクランク状に折れ曲がった溝が確認されているが、この部分が「牧」の中で特殊な機能を果たす場所であったことが推定される。例えば、追い込み施設などが想定されよう。

細田遺跡では、中央部で土橋が構築されていたことが確認された。土橋は中原遺跡においても検出されているが、この例は溝を掘り残す形で最初から計画的である。しかし、細田遺跡の例は当初から造られていたものではなく、追加されたものであり、こうした点に差異が認められる。

また、今回細田遺跡で溝と住居址の切合い関係が初めて確認された。6世紀代の住居址が溝によって壊されており、溝の構築年代は6世紀以降であることが立証された。これまでは検出された遺物から8～9世紀の施設と考えられていたが、7世紀まで遡る可能性も生じてきた。

このような溝の検出は中野谷地区では下塚田、中原、下宿東、細田・和久田と4つの台地に存在することが明かとなった。そして、これまでのところ溝は中野谷地区の東から南にかけての地域を巡っており、あるいは中野谷地区全体を取り囲むように掘られていることも推測される。このように、この地区には奈良・平安時代を中心とした時期に、大規模な「牧」の存在が推定される。このように「牧」の存在を追認する資料がさらに増加したが、これは今回の発掘調査の大きな成果である。

調査組織

教育委員会事務局

教育部長　　茂木勝文

社会教育課長　多胡泰宏

文化財係長　　小山治男

主　　事　　大工原　豊（調査担当）

　同　　千田茂雄

主　事　補　　深町　真

発掘調査・遺物整理従事者

秋山広吉	石井久子	上原藤男	打越　進	(故)小野始
小野泰野	金井京子	金谷清一郎	佐藤佐由里	清水　正
白石俊子	神宮香代子	神宮幸四郎	鈴木茂美	鈴木八郎
須藤ダイ	高橋敏男	瀧沢　徹	多胡梅子	多胡かつ子
多胡　静	多胡末子	多胡光子	多胡　操	多胡好江
田島元治	田島かつ子	田島せい子	田中利策	田村信子
中川京子	古立　京	増田トヨミ	丸岡民子	山田きの江
山村ヨネ子	湯川光子	和田宏子	和田光江	

中野谷地区遺跡群発掘調査概報 4

—平成 3 年度県営畑地帯総合土地改良事業

横野平地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

発　行　日　平成 5 年 3 月25日

編集・発行　安中市教育委員会

群馬県安中市安中一丁目23—13

印　　刷　朝日印刷工業株式会社